

地域研究の視点について——国民文化論のイデオロギーと映画

< I 西洋から見られる他者としての日本 >

3-5 共有される視線について その2 見られる者の出現

- ・アジアへの映画の伝播 = 見られる対象としてのアジア
(被観察者、被支配者・近代化(啓蒙/教育)されるべき他者)

【映像①】リュミエール、『東京の通り』(1900年代)

【映像②】ベンジャミン・ブロスキー社、『Beautiful Japan』(1918)

- ・時空間の共有、学術的観察者の視線の共有
- ・アジアにとっての「近代」の始まり
 - ・「西洋化」/それへの抵抗(竹内好美)
 - ・西洋の「他者」として可視化される経験

3-5-1 可視化の諸相1：内国勸業博覧会事件

- ・第五回大阪内国勸業博覧(1903年)
 - 「学術人類館」における「他者」の展示
(吉見俊哉『博覧会の政治学—まなざしの近代』(中公新書)、1992年)
「万博=帝国主義の巨大なディスプレイ装置」

3-5-2 可視化の諸相2 <イデオロギー>としての人種・民族の可視化

- 『散り行く花』(1919年、D.W.グリフィス)のリチャード・バーセルメス
- ・意図的な誤読(同一性の意図的な回避、結果としての他者排除の構造)

<Ⅱ アジアから見られる他者としての日本>

1 中国映画における日本人表象の変遷

1931	満州事変	孫瑜『おもちゃ』(1933)【映像資料①】
1937	日中戦争開戦	
1945	日本敗戦(抗日戦争の勝利)	
1949	中華人民共和国成立	陳鯉庭『麗人行』(1949)【映像資料②】
1966	プロレタリア文化大革命(～1977)	趙明『鉄道遊撃隊』(1956)【映像資料③】
1972		詹相持・韓小磊『サクラ』(1979)【映像資料④】
1978	日中国交正常化 日中友好条約締結	

1-1 『おもちゃ』1933年

イエ(ロアン・リンユイ)はこどものおもちゃ作りの名人。昔は体が悪く横になってばかりだったが、ある日おもちゃのアイデアがわき、作ってみると近所で大好評を得たことから、自分のおもちゃ工房を開くことになった。娘のチュール(リー・リーリー)や家族、近所のおじさんたちと一緒に工房でおもちゃを作り、平穏な暮らしがしばらく続いた。その後、子供の一人がさらわれてしまったり、戦争が起こったり、苦難の時代が到来する。おもちゃ工房の仲間たちに支えられ、イエは強く生きていくが、最後には発狂してしまう。

- ・ 聯華公司について
- ・ 社会主義リアリズム
- ・ 暗示的な日本描写(租界当局による検閲対策)

1-2 『麗人行』1949年

1944年、上海は日本軍の占領下に置かれ、中国内地から断絶された「孤島」となっていた。日本軍の監視をかいくぐり、上海を解放しようという志を持った若者達は、新聞記者や店主等一般市民として生活する傍ら、密かに地下工作活動を行っていた。日本軍に強姦されてしまったチンメイ、地下工作員として上海で抗日活動を行っているリー・シンチュン、国民党にすりより私腹を肥やす商売をしていた夫と分かれ、かつての恋人のもとへ戻ろうとするチャン・ユーリャンの三人の女性の生き様を描いた作品。

- ・ 二つの日本人イメージ
軍人 / 民間人(知識人、内山完三か?)
- ・ スパイ映画(ノワール映画)としての完成度の高さ

1-3 『鉄道遊撃隊』

1940年、日中戦争の山東省のある村では、鉄道遊撃隊が敵軍（＝日本軍）の列車を果敢に迎撃、敵の輸送路に大きな打撃を与えていた。飛虎隊と称された彼ら遊撃隊は村人からも篤い信頼を勝ち得ていた。日本軍の小林は、優秀な部下の岡村を呼び寄せて遊撃隊征伐に乗り出したが、失敗に終わる。小林たちは、遊撃隊の壊滅を目論み、さらなる大軍を投入した。村人たちも巻き込んだ、大規模な白昼戦が始まった。

- ・中国ナショナリズムの高まり
- ・ジャンルとしての戦争映画確立（『地雷戦』 / 『地道戦』 / 『南北征战』）
- ・「民族の敵日本軍人」のイメージ定着（狡猾/冷徹/残酷/好色/滑稽）
→イレデンティズム（irredentism, 失地回復運動）としての中華ナショナリズムの正統化

1-4 『桜-サクラ』

日中共同の大型建設プロジェクトの指導者として訪中した日本側現場監督森下光子は、中国からの引き揚げ者だった。中国で生まれた直後、乳飲み子を連れての引き揚げを断念した光子の母は、光子がある中国婦人に託した。それから数年間、光子は中国人の家庭で大切に育てられたが、やがて帰国した。光子がプロジェクトのために北京空港に降り立ったとき、中国側責任者陳建華は、光子がかつて本当の妹として暮らしたあの日本人であることを察した。しかし、光子は気づかず、今や連絡がつかなくなってしまったかつての中国人の家族を捜したいという。陳は、真実を告げようか否か、葛藤する。

- ・製作の背景 日中関係の回復
1972年 国交回復、日中共同声明
1978年 日中友好条約
- ・人間らしい日本人の登場（文化の agent 的存在）
非軍人/女性/インテリ

2 まとめ

- ・日本文化論の内容の変容と同様、時代ごとの公的ナショナリズムを反映
→ Chen, Xiaomei, *Occidentalism*

3 考察：可能性の提示

「台客」というファッション・スタイル

参考：張小虹「私たちはみんな台湾人のようなもの—台客から台妹へ」

松浦恆雄他『越境するテキスト—東アジア文化・文学の新しい試み』（研文出版、2008）

「日本研究」が背負わざるを得ない政治性に眼をむけつつ、そこに付与された新たな意味

をくみ取る作業